

サンタ・プロジェクト

真子 和哉

(16-1, コロンビア, 環境教育, 佐渡市立佐和田中学校)

1 はじめに

平成 18 年 12 月から、現在の勤務校である佐和田中学校でサンタ・プロジェクトを始めた。これは、(コロンビアでの経験を教育現場に還元したい)という、ささやかな試みである。現在プロジェクトは進行中で、最終的な成果を示すことはできないが、プロジェクトに込められた「願い」と生徒たちの活動の様子が少しでも伝われば幸いである。

2 プロジェクトの概要

コロンビアで活動する N G O ベルサージェス地域開発センター（以下センター）と佐和田中学校の 2 者間で行われるプロジェクト。日本から、センターが支援対象としているコロンビアの貧民層の子どもたちへ支援物資を送るという活動。

3 目的

コロンビアの貧しい地域に住む子どもたちの生活の状況を知り、どのような支援が必要かを考え実行する活動を通して、開発途上国の抱える貧困問題について理解を深め、国際協力に積極的に参加しようとする態度を育てる。

4 方法

コロンビアの子どもたちの状況を知るために、自分が隊員の時に収集した資料や写真等をパワーポイントにまとめ、講演会という形で全校生徒に発表した。その後プロジェクトの企画・運営を J R C 委員会（各種ボランティア活動や募金活動等を行う委員会）が担当し、支援の必要性を全校生徒に訴えた。活動時期が 12 月だったこともあり、プロジェクト名は「サンタ・プロジェクト」とした。

J R C 委員会では、どんな支援物資を送るかについては生徒一人一人に任せることに決定した。何が必要であるかと考えることが、遠いコロンビアの子どもたちと心を通わせる第一歩だと考えたからである。支援物資の収集期間は 1 週間とし、その後梱包してメッセージを添えて国際宅配便でコロンビアに送る。センターでは到着した物資を一つ一つ袋詰めし、子どもたちに配る。最後に受け取った子どもたちのメッセージや写真を日本に送ってもらう。以上がプロジェクトの簡単な流れである。

5 協力隊員としての仕事

配属先は首都のボゴタの北部に位置するウニアグラリア農業大学で、この大学が立ち上げたプロジェクト「センブラル・パス（平和の種蒔き）」に参加した。このプロジェクトは卒業を控えた高校2年生（コロンビアでは小学校が5年制、中学校が4年制、高校が2年制）に職業訓練を施すことである。具体的には農業関連の企業家として必要な「経営学」「栄養学」「衛生学」「食品加工学」「畜産学」「建築学」などの知識・技術を伝えるというものである。

6 コロンビアの現状

以下、全校生徒にコロンビアに住む子どもたちの現状を説明する際に使用したデータをいくつか示してみる。

（１） エストラート

コロンビアの社会システム。住む地域によって公共料金や税金、商品の値段が違う。その基準がエストラートであり、6つの区分がある。エストラート1が最貧民層でエストラート6が最富裕層である。例えば、エストラート1の公共料金はエストラート6が払い、高等学校の授業料もエストラート1は全額免除となる。

（２） エストラート別の就学児童・生徒数

表1は首都ボゴタの教育委員会がホームページ上に公開している2004年の就学児童・生徒数のデータである。これを見ると貧民層の1・2・3の子どもたちが全体の約88%を占めていることがわかる。つまり、コロンビアは極端なピラミッド型の格差社会なのである。

表1 エストラート別の就学児童・生徒数

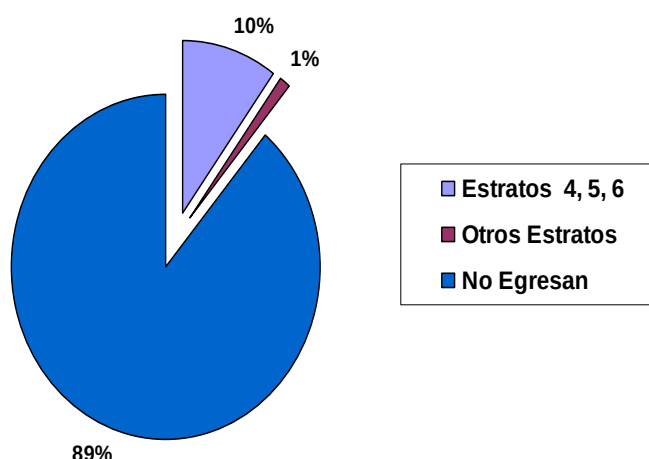
エストラート	人 数	割 合
1・2	745,526 人	46.3 %
3	660,734 人	41.1 %
4・5・6	201,341 人	12,6%
計	1,572,925 人	100,0 %

（３） 大学の卒業状況

表2は2004年のボゴタ市の大学生の卒業状況を調べてみると、全体の89%の学生が中途退学者である。原因は、定かではないが、日本に比べて進級基準が厳しいことと、金銭的な問題が係しているように思われる。ボゴタ市の国立大で日本語を教える隊員は、通学に必要なバス代がないために退学していく学生もいると言っている。

表2 エストラート別大学卒業状況（ボゴタ市教育委員会）

さて、残りの 11%を見てみると、そのうちの 10%がエストラート 4・5・6 出身者で、残りのわずか 1%がその他のエストラート、すなわち貧民層の出身者ということになる。このデータから開発途上国における教育格差という、もう 1つの問題も見えてくる。



(4) 私の夢

活動期間の 2 年間で約 25 校を訪問した。貧しい地域に建つ学校に共通することは、幼稚園、小学校、中学校、高校のオール併設校であることと、児童・生徒数が異常に多いということである。1 番規模の大きかった I N E M という学校は午前の部と午後の部を合わせて 12,000 人の子どもたちが通っていた。

さて、その I N E M で高校 2 年生を対象に意識調査を行った。アンケートの項目は「大切なもの」、「尊敬する人」、「日本の印象」など 10 項目であった。ここでは、「私の夢」という質問に対する結果を見てみよう。調査人数は 100 名である。1 位は「進学して、専門職に就くこと」で、大多数の 93 名の生徒がこう書いていた。これは、エストラート 1・2 出身の彼らが高校を卒業しても進学はおろか就職もままならないという社会の現状を反映していると思われる。先に示したとおり、2004 年の大学卒業者に貧民層の学生はほぼ皆無なのである。

(5) 算数の授業

ボゴタで最も貧しいサン・クリストバルという地域のヌエバ・ローマという学校で、小学校 3 年生の算数の授業を参観した。足し算の授業だったと記憶する。まず教師が図書館から持ってきた教科書を配る。といっても 1 人 1 冊ではない。3 人に 1 冊である。だから子どもたちは机を寄せ合ってグループの形で 1 冊の教科書を見合う。次に教師が支持を出す。「何ページから何ページに書いてある問題をノートに写しなさい」この作業が延々 30 分程度続く。それからノートに書いた問題とにらめっこが始まる。

まだ教科書があるのはいい方で、教科書が存在しない学校がほとんどである。コロンビアの貧しい地域に建つ学校での一般的な授業は、教師はホワイトボード用のマジックを一本持って教室に行くのである。

7 コロンビアの学校教育について

(1) T I M M S

1995 年に実施された第 3 回国際数学・理科教育調査（T I M M S :Third

International Mathematics and Science Study,1995) は世界 46 カ国・地域が参加した国際的に有名な調査である。この調査は第 8 学年(中学校 2 年生)について 1995 年、1999 年、2003 年の 3 年間の数値の比較をすることを目的に実施された。コロンビアは **1995 年の 1 度のみ**の参加であった。(1995 年の参加国数は 41 ヶ国)

(2) 世界水準から見たコロンビアの数学教育の現状

表 3 第 8 学年生の数学の得点平均

国名 (順位)	得点
シンガポール (1)	643
日本 (3)	605
アメリカ (28)	502
コロンビア (40)	385
(国際平均)	(513)

コロンビアは参加 41 カ国中 40 位。(最下位は南アの 354 点)

表 4 第 8 学年の数学の領域別平均正答率

国名	分数・数感覚	幾何	代数	資料表現・分析、確率	測定	比例
シンガポール	84	76	76	79	77	75
日本	75	75	72	78	67	61
アメリカ	59	48	51	65	40	42
コロンビア	31	29	28	37	25	23
(国際平均)	(58)	(56)	(52)	(62)	(51)	(45)

表 4 からコロンビアはどの領域においても国際平均の半分に近い成績であることがわかる。特に「測定」は日本の小学校程度の問題で、どれだけ作図をしたり、面積や角度の計算をしたりしたかという経験が正答・誤答を分けるポイントになる。

表 5 施設や設備が不足している生徒の割合 (%)

国名	教材	物品予算	校舎・グラウンド	冷暖房・照明	教室の広さ
シンガポール	10	5	32	17	31
日本	17	24	31	35	30
アメリカ	26	17	43	15	46
コロンビア	52	48	42	40	32
(国際平均)	(36)	(36)	(46)	(31)	(46)

表5でコロンビアは特に「教材」「物品予算」が不足している生徒が約半数にのぼることがわかる。つまり教科書不足、教具不足の実態がはっきりと表れている。

表6 数学に関する教具・教材が不足している生徒の割合(%)

国名	パソコン	パソコンソフト	計算機	数学図書教材	AV機器・ソフト
シンガポール	26	36	5	16	22
日本	23	47	14	17	26
アメリカ	68	67	32	49	50
コロンビア	76	80	60	70	79
(国際平均)	51	54	29	37	43

この表6で表5の「教材」「物品予算」の不足の内訳が詳しくわかる。コロンビアではほとんどの物品が不足している。

8 子どもたちの生活

子どもたちの生活を写した写真をお見せする。写真1は富裕層の住む地域で母親と共にゴミを拾う子どもの姿である。拾ったダンボールや紙などをまとめて業者に持って行き、わずかなお金と交換して、その日の生活費にする。



写真1

写真2、3、4、5は貧民地区を写したものである。この場所は標高3,400mを超える。ボゴタはもともと2,600mに位置するが、周辺農村部からゲリラに追われて逃げてきた避難民の彼らには高地しか住む場所がないのである。常春のボゴタと言っても日中10℃を越えるくらいである、彼らは、レンガを1つずつ積んで家を作る。写真からわかるように、水は汚れ、ガスは通っていないので薪を燃やして炊事をする。



写真2



写真3



写真 2



写真 3

9 プロジェクトの願い

センターが支援対象にしている約 1,500 人の子ども達はサンタがプレゼントを持って来たりはしないことを知っている。それは、へたな希望を抱いて失望しないよう、プレゼントを用意できない貧しい親がそう教えるからである。「クリスマスには期待してくれるな」と。このような子どもたちにある日遠い日本からプレゼントが届いたら……。もしかしたら（この世も捨てたものではない）と感じ、他人の愛情を信じられるようになるかもしれない。これがコロンビアの子どもたちへの願いである。ある童話作家はこう語っている。「子どもたちはサンタクロースが実在しないことをいつかは知る。しかし心の中でサンタクロースが占めていた空間は彼や彼女の中から消えることはない。サンタクロースが体現する人間の温かい愛情や思いやりを受け止め、今度は自分が与える側にまわること。そのためのゆとりを一人一人の子どもの心の中に育むためにサンタクロースは存在する。」

平成 19 年 1 月 22 日現在、佐和田中学校の生徒が用意した支援物資（玩具、筆記用具、衣類等）は大きなダンボール箱 10 個に余ることを付け加えてこの報告書を終わりとする。

